李海英発表に対するコメント／渡辺直紀（武蔵大）[1]

植民地時代のプロレタリア文学の作品のうち、労働小説の代表作として挙げられる短篇「過渡期」（1929）や長篇『黄昏』（1936）の作者・韓雪野は、1930 年代後半に農民小説『濁流』三部作を発表している。「洪水」（1936）、「賦役」（1937）、「山村」（1938）がそれだが、これらはみな韓雪野の故郷、朝鮮半島東北部の咸鏡道の農村を舞台としており、登場人物であるこの地方の農民の言葉には、豊かな方言の使用まで見られる[2]。この韓雪野が、満洲を舞台に開拓文学の作品を日本語で発表している[3]。京城で発行された週刊の日本語新聞『国民新報』に 1939 年 6 月 4 日から 9 月 24 日まで連載された中篇小説『大陸』がそれである[4]。

この中篇小説は、満洲の奥地の移民村で農地開拓や金山発掘に従事する日本人・大山博が、現地で開拓に協力する満人有力者の娘・瑪麗と出会い、三角関係や民族の違いによる差別、密偵の指示による馬賊団の襲撃・拉致事件など、さまざまな障害を乗り越えて、最後に二人が将来を約束するというものである。主人公の登場人物の２人は、男性が日本人で女性が満洲人という設定だが、満洲の開拓村で大山とともに行動をともにする林一夫（はやし・かずお）は、父の代からこの地にいて満洲を第二の故郷と考えており、父はＹ市（龍井市？）で朝鮮人学校を作り、林自身もそこを卒業したとされているからこの林は朝鮮人・林一夫（リム・イルブ）であることがわかる。だが、この作品で朝鮮人や朝鮮人開拓村など、朝鮮的なものは後景に追いやられている。

物語がやや進むと、東京女子医専を出た大山の許婚・雪子に大山との仲を裂かれた瑪麗が手紙を残して大山のもとを去ってしまう場面がある。その手紙で、作者・韓雪野が、作中の登場人物である満人女性・瑪麗に語らせているのは、満洲における民族協和の理念である。二人の愛が未完成でも、それは来るべき将来の「もっと大きな何かの形」によって完成されると瑪麗はいう。朝鮮人や朝鮮人開拓村の後景化にしても、この瑪麗のメッセー

---

[1] このコメントは、拙稿「植民地朝鮮のプロレタリア農民文学と満洲―「協和」の叙事と「再発明された農本主義」」、『日本学報』第 74 輯 2 巻（韓国日本学会）、2008.2、pp.205-226 の一部を改変したものである。

[2] 양문규,「일제하 한설야 소설의 농촌, 농민의 형상화」『한설야 문학의 재인식』(소명출판, 2000), pp.136-143.

[3] 小説として読むに足る日本語能力を韓雪野がどこでどのように身につけたかについては、あまり定かでない。日本での滞在歴と日本語能力は必ずしも相関関係にあるわけではないが、ちなみに作家自身の回顧によれば、彼は 1921 年から 1923 年 9 月まで日本に滞在し、日本大学史学科に在籍したものの関東大震災によって朝鮮に戻ったという。従来の研究や韓雪野の年譜にある事実は、ほぼこの作家自身の言葉によるものである。だが布袋敏博によれば、この時期の日本大学の学籍簿や、関東大震災時に朝鮮に戻った東京留学生の名簿などに彼の名前は見当たらないという。호테이 토시히로「등단 이전의 한병도」『한설야 문학의 재인식』(소명출판, 2000), pp. 49-52.

[4] 『大陸』の新聞連載中には毎回、かなり大きめな挿画（尹喜淳と朴性圭によるもの）も掲載されている。また この 日本語小説『大陸』 は最近、韓国語 に 翻訳 され て 刊行 され 、김재용, 김미란, 노혜경 편역『식민주의와 비협력의 저항――일제말 전시기 일본어 소설선 2――』(역락, 2003)に収録されている。この小説を連載した日本語新聞『国民新報』は 1939 年 4 月 3 日に週刊新聞として創刊され 1942 年 8 月 30 日まで発行された。原本・マイクロフィルムともに韓国の国立中央図書館に所蔵されている。『大陸』以外に連載された小説作品として、張赫宙の長篇『処女の倫理』（1939 年 4 月 3 日-8 月 13 日連載）や李孝石の長篇『緑の塔』（1940 年 1 月 7 日-4 月 28 日連載）などがある。ちなみに創刊号の第一面を飾ったのは南次郎総督と尹致昊の対談「内鮮一体を中心に半島統治の改新を語る」である。

ジにしても、その後、拉致された大山の父親や大山自身の救出のために瑪麗が奔走するのも、これらに共通しているのは、各自の居場所をもって自らの仕事を全うすべきだということである。そしてここでその「各自」とは満洲国を構成する各民族のことである。各民族が力を出し合って大同団結するひとつのきわめて具体的な例を、韓雪野は、男女の三角関係というきわめて通俗的な人間関係を物語の中に絡ませながら提示している。

この民族協和の思想と並んで、この作品で強調されるのは、満洲という土地や環境が人間の性格を改造する空間だという点である。絶えず瑪麗に嫉妬の身構えしか見せなかった大山の許婚の雪子は、瑪麗の献身的な態度に心を打たれ、拉致から救出されて九死に一生を得た大山の病床に瑪麗を呼べるほど、心の余裕を持てるようになる。そして、今度は自分が、「何か大陸のために役に立つ人間になる、瑪麗と一緒に幸せになれ」という手紙を残して大山のもとを去る。このような雪子の変化を受けて、大山と林は、満洲という場所がこのように克己の場所、人間改造のユートピアであることを確認する。厳しい自然や環境の中で一心に農場開拓に勤しむ禁欲的な人間は、そのことを通じて自らをも変えていく契機をつかむ。また、満洲のこの厳しい環境は、単に農民をストイックにするだけでなく、もともと行動や人間関係に問題があったり、社会に適応できなかった人間さえも、肯定的な人物として作り上げるのである。これは、L・ヤングが満洲における「再発明された農本主義」を説明するなかで触れたように[5]、満洲という空間が、階級や民族などあらゆる人間関係に社会工学の観点から改革のメスを入れていくような擬似ユートピアであったという事実と表裏一体の関係にある。そのような人間像を提示するのに、文学ほど有用なメディアはない（そしてここでもまた叙事構造が通俗的だということはきわめて重要である）。

韓雪野がこの小説を発表した『国民新報』という媒体は単なる日本語新聞ではなく、当時の日本および総督府の施策、また戦争遂行のためのあらゆる思想宣伝が行われていた媒体である。だから韓雪野がこのような小説を日本語で書いて発表した背景には、一種の偽装転向的な理由もあっただろうとはとりあえず推測できる。しかし、そのようなカムフラージュのために韓雪野が準備した民族協和と人間改造の叙事は、あまりにも見事に当時の満洲と朝鮮の関係を例示し、また人々に満洲のユートピアニズムを鼓吹する装置として機能したとは言えないだろうか？[6]

---

[5] ルイーズ・ヤング（加藤ほか訳）『総動員帝国――満洲と戦時帝国主義の文化』（岩波書店、2001）、pp.191-226。

[6] 김재용「한설야―『대륙』과 우회적 글쓰기」『협력과 저항―일제말 사회와 문학』(소명출판, 2004), pp.237 - 240 は、韓雪野のこの小説の特徴を（1）日本語で書かれていること、（2）日本の満洲での諸政策を「五族協和」論で批判していること、（3）韓国人が主要登場人物でないことなどを指摘している。これらの指摘はすべて正当なものだが、特に（2）の点についてこのことをもって韓雪野が当時の時代や社会に対して批判的な立場を堅持していたとしている김재용の評価は、かなり一面的であると言えるだろう。「五族協和」論のみならず、当時の満洲国を支えていた数々のイデオロギーや理念は、このような形で旧来の国民国家に関する言説を越える形で「批判性」を担保しながら、動員の言説として包摂され機能していったからである。